

気になる全国の農産物の生育

九州は豪雨 関東は冷涼で日照不足に 東北太平洋沿岸は低温にヤマセ

令和元年は天候に悩まされる年となっている。2019年スタートは雪不足により農業用水の出水制限、関東においては早春の干ばつや遅霜被害、東北においては4月上旬の季節外れの降雪等、春以降も天候は荒れ模様となっている。すでに7月に入り1年の折り返しとなっているのだが天候不順のまま推移している。

沖縄や鹿児島島の離島地域を除くと5月は全国的に降雨が少なく、水稻においては育苗期の低温による苗作りの失敗を取り返すがの如く平年以上に高温で、農産物は全般的に順調な生育を示す地域が多かった。イネにおいては概ね分けつ数が過剰とも言える程に取れ、今後の管理次第では昨年不作を取り返す事が出来るのではないかと内心思われていた生産者も多かったのではないだろうか。水稻における主要栽培県においては各県で速報値を出しているが、どの県も平年並みもしくは生育が早まり“順調”という評価を出しているところが多かった。

しかし、6月中旬以降は一転し、多くの地域で天候不順が続いている。九州においては集中豪雨により鹿児島・宮崎県南部、熊本で避難指示が頻発され生活に支障を来すほどの被害が出ている地域もあるようだ。被害に見舞われた地域の皆様には謹んでお悔やみを申し上げる。また、関東では約30年ぶりの低温・日照不足が続くキュウリ、ナス、ピーマンなどの果菜類の相場が軒並み上がっている。写真で掲載しているが、日照不足によりキュウリは曲がり果が多く売り物にならないものが発生しており、販売単価を押し上げる原因のひとつとなっているようだ。更に、東北の太平洋沿岸部では7月に入り北東より冷たい風が吹く「ヤマセ」が発生し低温注意報が発せられ、農業被害対策本部が各県に立ち上がるという声が聞こえて来ている。一方で東北の日本海沿岸地域の各県は山形県内陸部の果樹が局地的にひょう害に見舞われたところもあったが、その他は比較的天気恵まれており水稻においても生育は順調であった。秋田県においては全般的に水不足で、水稻を作付する予定であった田んぼに水が来なく、作付を断念し大豆を播いた田んぼがある。しかし、その大豆を播いた田んぼもカラカラで今にも枯れてしまいそうな生育を示す大豆が多く見られている。



日照不足による影響で曲がり果や果皮色が薄くなっている
(都内の家庭栽培キュウリ)

山形県日本海沿岸部では7月10日過ぎから約1週間に渡り断続的に風に見舞われ、これまで順調な生育を示していたイネは葉先がやられ赤く枯れてしまい生育は停滞、葉色が一気に落ちてしまっている現象が起きている。葉色が落ちた対策として、追肥を行ったほうが良いか？、といった相談が生産者から多く来ているという。関東では水稻早生品種は出穂期に差し掛かって開花が始まり、東北においては幼穂形成期真っ只中であり、イネの生育にとっては大事な時期のひとつである。この時期において、日照不足や低温、フェーン現象に遭遇してしまうとダメージを被る場合が多い。引き続き肥料商は生産者に対して肥培管理対策を徹底してアドバイスをを行い、天候不順に負けない農産物生産を手助けする役割が期待されよう。次号も引き続き農産物の生育状況を発信していきたい。

東部菱肥会実務者研修会 in つくば

去る5月28・29日、茨城県つくば市において東部菱肥会実務者研修会が行われ、14 特約店より24名、賛助メーカー6社、当社スタッフを含め合計42名が参加、盛況に開催された。

1日目の座学講習では「農業ソリューションビジネスの展開」として、三菱商事(株)農業ソリューション部の平井リーダーより同部の取組について、ウォーターセル(株)スマート農業推進部の藤原取締役より同社のアグリノートの利用方法と展望について説明がなされた。また、(株)東京商工リサーチの松永情報部長より「押さえておきたい与信管理のポイント」と題して講演いただいた。

2日目は場所を変えて井関農機(株)の夢ある農業総合研究所に訪問、同社の雑賀氏の案内によりスマート農業に関する最新農業機械を見学した(右写真ご参照)。現在、農業界においては労働の軽減化・経営効率化を機械や情報集約ツールによる、いわゆる「スマート農業」の実装化に向けた提案がなされ既存の農業関連企業のみならずベンチャー企業の動きも活発となっている。そのトレンドを肌で感じたいという要望が高かったため今回の企画が組まれた。また、「掛け」による売買が通例化している農業資材の商取引におけるリスク管理の一環として、与信管理の基礎的なポイントを学習する機会も設営した。



さて、ウォーターセル社が開発した「アグリノート」は、農業者の作業行程管理だけでなく営農管理機能も組み込まれており現在普及中である。このアグリノートの良い点は多方面の企業と連携することを拒んでないところだ。今までの営農管理ソフトは提携している協賛企業だけしか利用できない場合が多く、利用したくとも手持ちの農機が提携企業に入っていない場合はデータが利用解析出来ず、生産者にとっては使い勝手が良くない場合が多かった。一方、ウォーターセル社は今後もアグリノート普及のため多くの企業と連携していく方針で、ベンチャー企業らしい柔軟な対応が期待出来る。更に、このツールの利用者は生産者だけでなく生産物の購入先もトレーサビリティ管理の一環として情報共有できるようなソフトとなるため利用価値が高まり生産者から消費者までつながるシステムとなる可能性もある。また、今回訪問した井関農機(株)の夢ある農業総合研究所では惜しみなく最新鋭の農業機械を紹介いただき、所内では同社が推進している密播疎植栽培の説明を受け、展示ブースでは可変施肥田植機・収量コンバイン・自走トラクターのデモ機を見学することが出来た。農業機械の革新においては、人手と労力がかかる農作業場面において、生産者の要望で人力低減のためにその野菜に合わせた専用の定植機や収穫機が上市されてきた歴史がある。これも日本の農業現場にわけて深化していることが伺え、国内メーカーのお家芸ではないかと感心した次第だ。どれも工夫された機械ばかりで機械好きにはたまらない機能を持つものばかりであった。屋外では下町ロケットばりの自動運転トラクターの走行実演、ドローンによる粒状肥料の散布デモを見学することが出来た。ついに粒状肥料も空から追肥出来る時代となり、生育に合わせた施肥量をコントロールすることで省力化や安定生産が出来るといった機械メーカーならではの提案方法が感じ取られる研修となった。(東京支店)

7月だというのに関東地方は肌寒い日が続きましたがいよいよ梅雨明け間近です。涼しい陽気に身体が慣れてしまい急な暑さに負けてしまいそうです。それでも、夏は暑い方がいいですね。次号は当紙も夏休みを頂きます。次回発行は8/28の予定です。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>